

武蔵野日曜集会

プレローマ

――ヨハネ伝第1章12～18節――

1994年2月13日

小池辰雄

神光 真現者 太初に愛あり プレローマ 大いなるかな心や 恩恵と真理

【ヨハネ1・12～18】

9 もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。10 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。11 かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。12 されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。13 斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。14 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理にて満てり。15 ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う 『わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり』と、我がかつていえるは此の人なり。16 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。17 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。18 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

●神光

9 もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。

キリストは「真の光」。我々は太陽の光で光というものを初めて知るわけですが、太陽よりも凄い光がキリストの光だ。太陽の光は我々の肉眼によっていろいろなものを見せてくれるわけです。ところが、キリストの光はいくら肉眼でもこれは見えない。魂の眼で見ないと見れない。だから、一般の人は――私も始めはそうでしたが――キリストを受けとれない。キリストという光は、これは全存在が光なんです。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書を読んでキリストにぶつかるわけです。そうすると、この人はケタが違う、我々とは質が違う。ところが、キリストは何ものでもない。

「キリストが光である」

ということは神さまの光を光らせているということです。キリストは無光者なんだ、光な



んか無い。この「無」というのは虚無ではない無ですから、これが無限無量になる。神の光です。

「キリストが光である」

と言うときは、神さまの光を光らせている。キリストほど完全に神に平伏して自分を無にしているひとはないわけだ。だから私は、

「キリストは無者である」

と言う。無者の元祖はイエス・キリストです。

そうすると、神の光が、神光が入ってくる。我々の信仰もこの神光なんだ。キリストの光をいただいている。だから、いわゆる信仰なんか要らない。神さまの光が入ってくる、キリストの光が入ってくる。信仰とは身体で受けとる、全存在で受けとることです。信ずるとは体受すること。信ずるとは、観念的に頭で、心で信じているというものではない。そんな信仰はダメです。体受する、身体で受けとる、全存在で受けとる。もし信の字を使いたいなら「信受」だ。仰いでいたってダメなんだ、受けとらなければ。太陽の光をいくら仰いでいたってダメだよ、太陽の光を我々は受けとって光の中にいることが大事なんだ。

空気を思っていやしない。空気を吸っている。空気に囲まれて空気を吸っている。氣の世界です。肉体は空気に囲まれ空気を吸って生きている。我々はキリストの靈氣を魂が受けとって、靈氣を体受している。それが本当の信仰だ。信仰という字は困るよ。信受する、神の光を体受する、それが本当の現実、真の現実です。真の光を身体でもって受けとる。それが真の現実だ。我々の相対的な現実ではない。本当の現実、滅びない現実、移りゆかない現実、昨日も今日も明日も同じこと。それが本当の現の世界、靈的な現の世界です。これは大変なことです。

●真現者

10 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。11 かれ

は己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。

ユダヤ人はこれを受けなかった。どこまでも「モーセ、モーセ」なんだ。モーセではダメなんだ、モーセは律法の世界だから。預言者でもまだ足りない。預言者イザヤなんてのは素晴らしいが。これは正にキリストの預言的存在であつたけれども。

12 されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあた

え給えり。

キリストを受けると、我々は神の子なんです。キリスト者は神の子です。

13 斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。

「肉の欲によらず」



というのは、我々の生まれつきの自分の願いではないということ。「肉」というのは、「生まれつきの我」

のことをいう。生まれつきの我の欲によるのではなく、人の欲によらず、ただ神によりて生まれた。神によってキリストを通して生まれた。キリストを受けとって生まれた。

14 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。

神の言なるキリストは肉体をとって我らの中に宿りたまうた。

「幕屋を張った」

という字です。我らは神の栄光を見た。その栄光は変貌の山で一番よく顕したもうた。自分が光ってしまつて、弟子たちは目が眩んでしまった。

「恩恵と真理」

というのは時々でてくる言葉です。この「真理」という言葉は、何か観念的に聞こえてしまつて困る。「まこと」というのは「本当の現実」ということです。神の現実が「まこと」なんです。「真現」という言葉はないけれども、「まことのうつ」なんです。キリストは真現者、真の現なる者なんだ。教えではない。キリスト道あるいはキリスト現なんだ。うつなんだ。太陽の光が我々の肉体的存在を完全に生かしている。そういうように、キリストという光は我々の霊的存在を本当に在らしめている。

神の言、霊言は肉体となつて、我々と同じこの肉体的な現実となつて、我々のあいだに幕屋を張った、宿った。だから、栄光を見ざるを得ないわけです。「変貌の山」のことは特にルカ伝9章32節に出ています。

「父の独子」

とは、キリストは「父よ」と言った全くただ独りの独子ですから。ヨセフが父ではない。霊界の神さまが父なんだ。本当に不思議です。マリヤは聖霊によつてキリストをみごもったのだから。ヨセフが、

「おかしいな、子供ができるはずがないんだが」

といつて離縁しようと思つた。ところが、天使がやつてきて、

「そうではない。マリヤは聖霊によつて身ごもつて聖霊の子を生むのだ。お前が何も離縁することはない」

と、ヨセフは天使に言われた。あまりにも驚くべき現実で彼は戸惑つたでしょうけれども。

「恩恵と真理とにて満てり」

とは、キリスト自身が恩恵なんです。賜物（カリスマータ）というの、キリストからいただくいろいろなものが賜物だけれども、キリスト自身が恵み（カリス）の本体です。キリストはカリスなんで、いろいろな賜物はカリスマータです。キリストは恵みに満ちている、真現に満ちている。



15 ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う『わが後にきたる者は我に勝れり、
我より前にありし故なり』と、我がかつていえるは此の人なり』

ヨハネ福音書を書いたのはキリストの使徒ヨハネだけれども、この「ヨハネ」は洗礼のヨハネだ。洗礼のヨハネは、

「私はエリヤでもない。キリストを指し示すところのものだ」

と言った。キリストはヨハネのことを最後の最大の預言者だと言った。というのは、自分のことを神の子として顕したから。別なところでは

「しばらく黙っている」

なんて言ったけれども。

雪というものはおかしなものだね。水滴なんだけれども、あれは素晴らしい結晶をなしている。華のような結晶だ。自然現象というものは素晴らしいものだ。虹も水滴だし、雪も水滴なんだが、同じ水が雪になったり虹として現れたり。雪景色は美事なものです。

●太初に愛あり

ヨハネ伝というのは非常に不思議な霊的な福音書です。

「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。」

この第1節は凄い。私はこの「言」は、

「太初に霊言あり」

と思う。霊言です。ヘブライ語でもギリシヤ語でもない。神の霊言です。響きでもいい。

「太初に響きあり、響きは神と偕にあり、響きは神なりき。」

と言った方がいい。

動物は言葉がないようだけれども、あれはお互いに音で、響きで分かるんだね、鳴き方で。この言葉以前の思いを知るようにならなければ本当はダメなんだ。

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声きけば……」

ということ。鳥も真つ黒だし、闇の夜も真つ暗だ。その鳴かぬ鳥の声が聞こえるかという。中世のエックハルトというのはそういう境地が分かる神秘家だった。アッシジのフランシスコは鳥と会話したという。フランチェスコのところに鳥が寄ってくるんだ。言葉の奥の世界は愛なんです。愛がなければ、そういう言葉は読めない、聞こえない。理屈の世界ではないから。

「太初に愛あり、愛は神と偕にあり、愛は神なりき」

と、そう言ってもいいくらいなんです。ヨハネ伝の第1章1節をそんなこと言うのは他にいないだろうね。

4 之に生命あり、この生命は人の光なりき。

というけれども、生命は愛がなければ生命ではない。愛のないものは本当の生命ではない。



キリストという不滅の生命は、これは不滅の愛なんだ。愛と光は同質なんだ。太陽の光は我々を愛しているところの、生命づけている光です。ゲエテが、

「キリストと太陽の前には無条件に平伏す」

と言ったのは、さすがは大詩人ゲエテだね。そういう大詩人が日本にはいない。漱石さんも足りない。蘆花も足りない。藤村も足りない。徳富蘆花と島崎藤村はあるところまできたけれども、それから先へいかなかったからダメなんだ。夏目漱石は仏教的な悟りの方をねらっていたけれども、悟りではダメなんだ。

ゲエテは自然を愛した、そして自然に愛された。日本人は素晴らしい自然の中に生きている人類ですね。恵まれているんだ、日本というのは。その自然の愛を体感して、日本人は、その心は本当は優しいんです、いい自然を受けとっているから。万国の人種の写真を見たときに、日本人はやはり一番温和な顔をしている。烈しい顔をしてない。ヨーロッパのクリスチャンで、私はヒルティの顔は好きだ。あの人は本当に温和な顔をしている。ルターは信仰の戦いの人間だから、厳しい顔をしているけれども。フランチェスコだのヒルティだの、ああいうのはみな温和なんだ。

太陽と北風とが、ある旅人の上衣を脱がせる競争をした。風は一生懸命で吹いたら、旅人は一生懸命で着物をしっかりと持って脱ごうとしない。風の力ではがそうとしたってダメなんだ。太陽が暖めたら、ああ暖かいといって脱いだという。そういう話があるけれども、陽の光は風よりも力を持っている。愛の力です。

●プレローマ

14 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に

父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。

霊的な存在であつたキリストが肉体をとつて我々の間に幕屋をはった。それが「神の栄光」なんだ。福音書のキリストの言葉と行為、これは

「恩恵と真理とにて満ちている」

ところの言葉であり行為である。だから、福音書自身が天国ですよ。キリストという天国体が歩いて、ものを言ったりいろいろなことをやつたり、死人を甦らせたりする。大変なひとだ。棺桶に手をおいて、

「ごいようー」

と言ったら、若者が蓋をあけて出てきた。死人が甦って出てきた。みなびつくりしてしまつた、

「大変なひとだ」

と。イエス・キリストというのは本当に大変なかたです。正に神の現象体。前にも後にもいない。お釈迦さんも悪魔と戦ったり、いろいろな恵みのことをしましたが、キリストの



方がもう一つ現実が凄い。

このキリストの愛を本当に身をもつて証したのが賀川豊彦です。ただ賀川さんは霊的な力は少し足りなかったけれども、愛は深いひとです。

「¹⁶我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。¹⁷律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来るなり。¹⁸未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。」(ヨハネ1・16～18)

神の本当の現象体はキリストだけ。神の現、正に「現体」なんだ、「神現」「真現」なんだ。「プレローマ」とはギリシヤ語で「充ち満ちる、充滿」という言葉です。キリストは神の充滿者なんです。神の光も力も愛も生命も満ち溢れている人。「プレローマ」という言葉はパウロが時々使っている。パウロは賛嘆して言っている。パウロのローマ書なんかを読むと、キリストに圧倒されてものを言っている。キリストに逆らっていた最たるやつが完全にキリストにひっくり返されて、今度はキリストに満ちる人間になってしまった。パウロくらい鮮やかに変わったひととは他にいない。ローマ書というのはその点で素晴らしい書翰です。

「それ神の満足れる徳はことごとく形体をなしてキリストに宿れり。汝らは彼に在りて満足れるなり。」(コロサイ2・9～10)

「神の充滿」、これが「プレローマ」という字です。「満ち足れる徳」と訳してあるのは「プレローマ」という言葉なんです。神性の充滿ということです。

「神性の充滿はことごとく形をなしてキリストに宿った。汝らはキリストにあつてプレローマである」

ということ。

「汝らはキリストにあるところの充滿である」

と訳してもいい。我々はキリスト性の充滿にならなくてはいけない。十字架で空っぽにされると――神性の充滿は聖霊のことです――聖霊が満ちて、満ち足りてくる。聖霊の内容は非常に豊かなものですから。聖霊というのは充滿霊なんだ。

●大いなるかな心や

禪の世界で、榮西禪師が悟りの最後の世界で、我々がもっているいわゆる心でない本当の心――榮西が「大いなるかな心や」というその心は宇宙心だ――この宇宙心は本当の霊の世界、神霊の世界です。ゲーテなんていう大詩人はこの宇宙心的なものがある。榮西の禪の心は「大いなるかな心や」の一節に告白されている。

「大いなるかな心や。」

天の高き極むべからず、而るに心は天の上に出づ。

地の厚さ測るべからず、而るに心は地の下に出づ。



日月の光は踰ゆべからず、而るに心は日月光明の表に出づ。
大千沙界は窮むべからず、而るに心は大千沙界の外に出づ。
それ太虚かそれ元氣か。

心は即ち太虚を包んで、元氣を孕むものなり。

天地我を待つて覆戴し、日月我を待つて運行し、
四時我を待つて変化し、万物我を待つて發生す。

大いなるかな心や。

吾已むことを得ずして、強いて之に名づく。

是を最上乘と名づけ、また第一義と名づけ、

亦般若実相と名づけ、また一真法界と名づけ、

亦楞嚴三昧と名づけ、亦正法眼蔵と名づけ、

亦涅槃妙心と名づく。……教外別伝と号す。……」

凄いやつだね、この榮西というのは。そういう心は全く宇宙心です。キリストは宇宙心を持つている。仏道でもキリスト道でも、究極のところにくと相接するところがある。相類似するものがあります。概念の世界を超えていますから、通ずるわけです。藤井武先生の所に行っていた時に、先輩に佐藤得二という人がいましたが、これが『仏教の日本的展開』という本を書いてますが、なかなか面白い本だ。かなりそういう境地の分かった人です。

● 恩恵と真理

16 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。

「我らは皆その充満によつて、充ち満ちたところのプレローマを受けて、恩恵に恩恵を加えらる」

ということ。恩恵また恩恵で、圧倒される。

17 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。

もうケタが違う。律法の世界ではダメなんです。

「恩恵は審判にうち勝つ」

とヤコブ書にも書いてある。律法の世界は審判の世界ですから。恩恵の世界は赦しの世界。赦し、救う世界です。律法では赦はこない。ところが、ユダヤ人はいつまで経ってもキリストを受けとらない。結局、モーセで済みだから、非常に頑固なんだ。

「頑固な民」

といわれる。頑固なんだ。ユダヤ人というのはそういうところがある。その頑固な筆頭がパウロだった。その頑固な筆頭のパウロがひっくり返されて、キリストの恩恵の世界に入った。ユダヤ教ではいつまでたつてもダメなんだ、キリスト道にやってこない。



「律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理はイエス・キリストによつてやつて来た」

と。だから、それではつきりします。

¹⁸ 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

「独子たる神、即ちキリストが之を顕した」

というわけです。

こんなことを私は前に書いた。

「初めに原始を有つものは終末をもつ。永遠の神は天地創造とともに時間の中に顕れた。これが原始であり、その天地の完成が終末である。そこに神の歴史がある。無始無終のものは永遠をもたない。永遠者が過去現在未来を掌握しているのである。言と霊とはシノニム（同じ内容の言葉）で内実としては不可離の関係にあるので、ロゴス（言）と訳しても、普通の言葉ではない。霊的な内実と実力をもった言で、私はこれを霊言ないし言霊と訳したい。「初めに言霊があった」である。明治初年頃の訳に「原始に霊言ござる」という訳があった。同じ考えの人がいたものだあと嬉しく思った。古い訳には、「原始に道ありき」と書いてあって、これも捨てがたい。「道」とは意味的なものではなく、道的な実存者を表そうとしているからである。それでゲーテも『ファウスト』の中で、「ダス・ヴォルト」（言）にあきたらずして、「デア・ズイン」（意）、「ディ・クラフト」（力）そして最終的に「ディ・タート」（行為）（『ファウスト』1237行）と、ファウストをして訳さしめている。空言でなくて実言であるから、行為面からその実相を表現しようとしたのであろう。」

なんてことを書いてある。ゲーテはそういうわけで、

「初めに行為ありき」

と訳した。さすがはゲーテだね。

「恩恵と真理」

という言い方をしている。本当の真理は人を救う恵であるということです。そしてそれは、教えているのではない。全部、告白です。ゲーテが、

「自分の文学は全部告白である。鳥が歌うのが止むにやまれずして歌っているように。」

と言ったのは、そういう角度です。止むにやまれずしてものを言っているんです。

